ミャンマー、チン州に伝承される鼻笛文化の基礎調査および太平洋地域の鼻笛文化との比較研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-21 キーワード (Ja): 鼻笛文化, ミャンマー, チン州 キーワード (En): Nose-flute culture, Myanmar, Chin State 作成者: 西川, 浩平, Nishikawa, Kohei メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/697

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

洗足論叢　第46号　平成29年度

研究ノート

ミャンマー、チン州に伝承される鼻笛文化の基礎調査および太平洋地域の鼻笛文化との比較研究

A basic investigation of Nose-flute culture on the Chin State of Myanmar and a comparative study on the Pacific Ocean region

西　川　浩　平
Kohei Nishikawa

1. はじめに

1－1. 鼻笛とはなにか、東、東南アジア、オセアニアの鼻笛

鼻笛とは、口の息ではなく、鼻の息で演奏される笛であり、オセアニア、東アジア、東南アジア、アフリカなどの地域に存在している。

東南アジアにおいては、フィリピン、カリンガの演奏するトガリ（Tongali）や、マレーシア、サラワク州、カジャン、カヤン、ケンヤァの人々の演奏するセレングット（Selengut）などがあり、横に構えて演奏する竹製の笛である。音を出すメカニズムは、片一方の鼻の穴に、6mm程度の吹き口を充てて息を吹き込むフリー・エア・リード形式、いわゆるフルート式の発音構造である。

一方、オセアニアの島々を見ると、ニュージーランドのマオリの演奏する鼻笛、クーアウアウ（Kooauau）をはじめ、ハワイ島に伝わるオヘ・ハノ・イフ（Ohe Hano Ihu）（西川 2015）、またフィジィ、トンガ、サモアなどの島々にも鼻笛は存在する。これらの笛は、東南アジアの鼻笛よりも総じて太い管体を持ち、縦に構えて吹く。管の先端に小さな吹き口を開け、それを片一方の鼻にあて、息を吹き込んで音を出すフルート形式である。

東アジアに分類される台湾においても、山岳地域の少数民族に鼻笛は伝承されている。台湾南部、山岳地域に住むパイワン（Paiwan）族に伝承されている鼻笛、パリングト（Paringet）は、鼻の両穴を使って吹く2本一対になったものである。パリングトには2種類の形態があり、両管の先端に空けられた吹き口に直接、息を吹き込むフルート形式のものと、吹いた息が固定した風路を通過し、作り付けの鋭いエッジに当たることによって発音するフィップル・フルート属、いわゆるリコーダー形式のものがある（西川 2011）。なお、アフリカの鼻笛に関しての資料は極めて少ない。

東アジア、東南アジア、オセアニアと、それぞれの地域の鼻笛は異なった特徴を持っているが、共通点として、鼻笛の演奏を精神性の高い演奏行為と捉えられていること、その演奏行為が男女間の愛情表現に関係することなどが見られる。

1－2. ミャンマーの鼻笛研究の目的と付随するテーマ

ミャンマー西部に位置するチン州の山岳地域にも鼻笛文化が存在する。長く鎖国政策を続けていたミャンマー軍事政権が2011年3月、民政に移行され、旅行者、研究家などがミャンマーの少数民族地域に足を踏み入れることが容易となった。多様な文化が紹介され始め、そのなかでチン州の鼻笛文化の存在も知られるようになった。

鼻笛文化の分布としては、台湾、マレーシア、フィリピン、ハワイを含むオセアニアの島々など太平洋における島、半島地域であり、海路による人々の流れとしてその伝播の説明が可能である。しかしチン州の山岳地域は、南のベンガル湾からも遠く、ましてや他の鼻笛文化が伝承されている太平洋地域からは、ベトナム、ラオス、タイと3つの国が横たわっており、伝播の経路に疑問が湧く。また陸路による伝播を考えるならば、チン州まで到達してくる間の国、地域にも鼻笛文化の痕跡が点在する筈であるが、ベトナム、ラオス、タイなどの国、またベンガル湾に至るミャンマー、ヤカイン州地域などにも鼻笛文化は存在していない。

本研究の目的は、ミャンマー、チン州の鼻笛文化を調査することに加えて、太平洋地域の鼻笛文化との差異を比較検証することである。また付随するテーマとして、チン族の中のガーン族、ダーイ族の祖先が、何故、ポツリと海から離れた南部チン地域に鼻笛文化を伝承しているのか、その経路を探ることにある。

尚、本文章は、鼻笛文化に対する研究の経過報告とするものであり、何かしらの結論を導き出した論文とはせず、研究ノートの範囲としている。

1－3. ミャンマー、チン州の人々

2014年に実施された国勢調査によると、総人口51,486,000人に対して、チン州の人口は、男性230,000人、女性249,000人、合計479,000人である（The 2014 Myanmar Population and Housing Census）。チベット、ビルマ語族の民族集団に分類され、大きく北部チン、中央チン、南部チンに分かれる。方言からみた分類では53の民族によって構成される。宗教的にはキリスト教が多数派を占めて仏教徒は少数派となる。

2. フィールドワーク調査

2－1. 第1回フィールドワーク：2017年1月31日～2月8日　ヤンゴン市内

第1回目の調査は、情報収集と具体的な旅行計画を立案することに費やし、ミャンマー在住の民族学専門家、チン州渡航に精通している方など、多くの関係者より聞き取りを行った。

訪問調査の大きな問題が渡航時期であった。山岳地域は道路事情が悪く、現地で雨季の始まる前までに渡航を終えなければ、がけ崩れなどにより村が孤立し足止めされる危険性があった。加えて、日本の年度末決算時期の事情が絡み、新年度で雨季の始まる前、ぎりぎりの旅程を組まざるを得ないことが分かり、現地へのフィールドワークを4月後半と定めた。

2－2. 第2回フィールドワーク：2017年4月19日～29日

チン州ミンダ、ヨーポン、フラトゥイ、ジョーク各村地域への訪問調査。

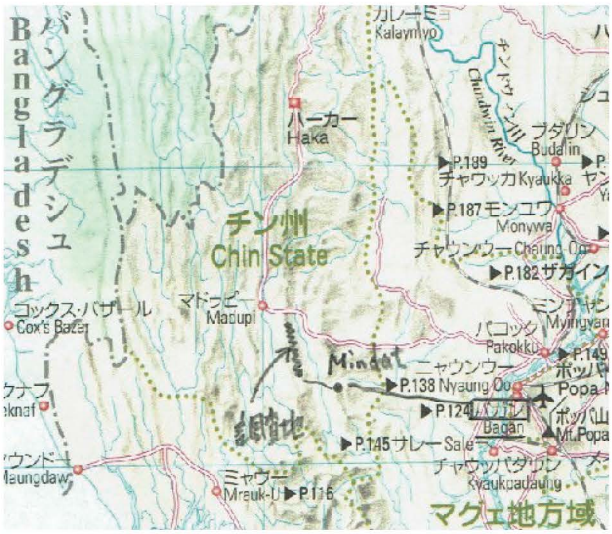


図1．ミンダ村周辺の調査地。（地球の歩き方 2015）より引用

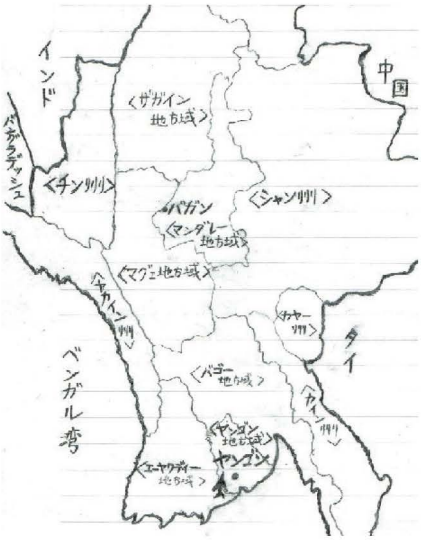


図2．ミャンマーの州

2－2－1. 一日目　2017年4月19日（水）成田－ヤンゴン

空路、成田空港より、ミャンマー・ヤンゴン国際空港へ移動。空港近辺ホテル泊。

2－2－2. 二日目　4月20日（木）ヤンゴン－ミンダ村

空路、ヤンゴン国際空港よりバガン・チャウンウー空港へ移動。空港よりパコック（Pakokku）へタクシー移動。パコックより乗り合いバスにてミンダ（Mindat）村へ移動。ミンダ村泊。

2－2－3. 三日目　4月21日（金）　ミンダ村

インタビュー：Daw Zo Then 女史 90歳　ガーン（Kaang）族[1]　ジョーク（Kyuk）村出身。

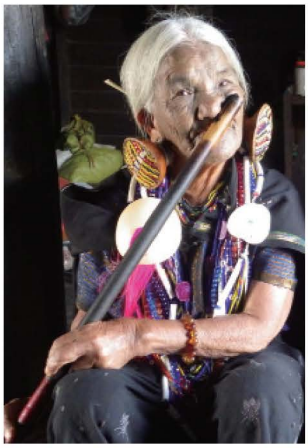
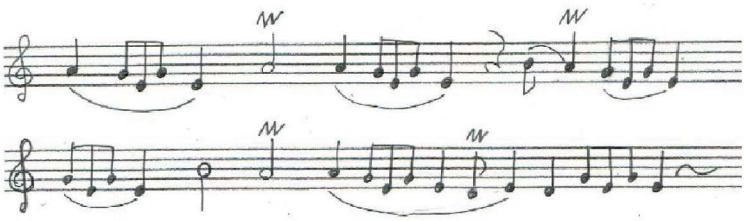


写真1．Daw Zo Then



譜1．Daw Zo Then 演奏譜

演奏曲：ミンダ村の自宅にて聞き取り。曲名は無い。悲しい時、大事な人が亡くなったり別れのときに演奏する。

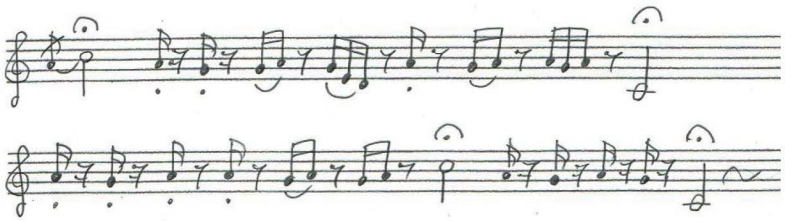
ジェンダー・愛情表現：

男女の別なく演奏。おもに悲しい気持ちのとき、癒しのために演奏。また男性が女性に好意を伝えるときにも演奏する。Zo Then 女史も 20 歳位のとき、男性から演奏された経験を持つ。男性はタバコ（パイプ）を渡し、その返答を待つ。女性側にも好意があれば受け取り、相手が嫌いだったらパイプを受け取らないという。

伝承　：鼻笛プールン（Pue Luen）を 15 歳のころ母親から教わった。その当時は多くの人が鼻笛を演奏できた。鼻笛はダーイ（Daai）族も吹いていたが、演奏が少し違っている。この二つの部族のみが鼻笛を演奏していた。父親の製作した笛を現在、演奏している。鼻笛の製作はしていない。村の年配者（60 歳以上）は、自然に家族から受け継いだが、現在、若い人たちは興味を示さない。娘にも教えたいが難しいから嫌だという。現在、出身地のジョーク村には 2，3 人吹ける人がおり、他の村でも少しはいるが、いずれも年配者で若い人はいない。

インタビュー :U Ning Kee 氏 62 歳、ジョーク村の近隣村出身、ガーン族、ミンダ村自宅にて聞き取り。

写真 2.　U Ning Kee　写真：後藤修身



譜 2.　U Ning Kee 演奏譜

演奏曲：鼻笛を演奏する状況は 2 つあり、自分が寂しい時、また祭事や人が沢山集まった夜、早朝、鶏が泣くときなどに演奏。村で人が亡くなった時に、一つの家にみんなが集り通夜が行われ、その人たちを癒すために演奏する。普段、昼間はあまり吹かず、夕方になって心が悲しいとき、愛しい気持ちになるときなど、8 時くらいから寝る前まで演奏する。

現在ではそのような風習は少なくなって演奏する人もいなくなり、通夜での演奏依頼もない。20 年程前まではそのような習慣があった。

ジェンダー・愛情表現：

悲しいとき、また恋人が遠いところに居て愛しく思うときに、その気持ちを表すように演奏する。離れ離れになってしまった人が帰ってきて嬉しいときにも演奏する。

伝承　：未だ村にいた18歳の頃、鼻笛に興味を持ち祖父母に教わった。父親も演奏する。村では葬祭の折に自宅に多くの人が集まることがあり、自分でも演奏してあげたいと思った。

ロンガイ（Raw Ngai）という竹で製作する。これは特別な竹で、村の山でしか取れないもの。自分で楽器を作るが今は2本しかない。村の森には笛を作れる竹が有るので、興味のある人に作ってあげたことがある。製作には竹さえあれば、丸一日は掛からない。

鼻笛をワタナ―がある人がいれば教えたいと思う。ワタナーとは、趣味よりも少し深い意味のある言葉で、誠意とか熱意の意味。

筆者は鼻笛を1本、Ning Kee氏より譲ってもらった。ミンダ村泊。

2－2－4. 四日目　4月22日（土）　ヨーポン（Yo Paun）村

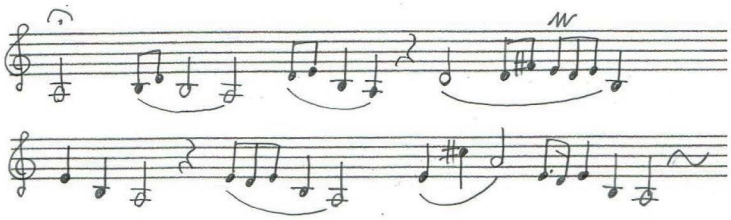
午前中、同行のジョーク村出身、民族文化研究家Salai Thang Kee氏から村のことや、民族芸能に関する聞き取りを行った（5－2）。

午後、同行の写真家、後藤修身氏、Thang Kee氏と筆者、バイクを3台チャーターし、運転手を加えて6名の連隊を組み、山道を6時間、ヨーポン村へ移動。ヨーポン村、村長宅泊。

2－2－5. 五日目　4月23日（日）　ヨーポン村

インタビュー：U Reng Kee氏 45歳、ヨーポン出身、ガーン族、自宅にて聞き取り。

写真3. U Reng Kee　写真：後藤修身



譜3. U Reng Kee　演奏譜

演奏曲：親しい人の死に面したときにいつも演奏する曲。ガーン族で鼻笛は一種類だが、ダーイ族には長い鼻笛をプールン（Pue Luen）、短い笛をピーリン（Pii Lin）と2種あり、共に指孔3孔である。

ジェンダー・愛情表現：

夫人が亡くなり、人々が弔いにやってきて何日も泊まって弔意を示すことがある。主人がもしも死んだ夫人のことを愛していれば、この鼻笛を吹きたいと思うであろう。この笛の演奏において、どれだけ二人は愛し合っていたかを表現できる。

また好意を持つ婦人にこの笛を吹けば、相手はいつもよりも魅力的になり、目や表情でコンタ

クトが取れるようになる。いわば好意を伝える道具としての演奏で、その後、付き合いが続けば2，3か月後には仲良くなっている。

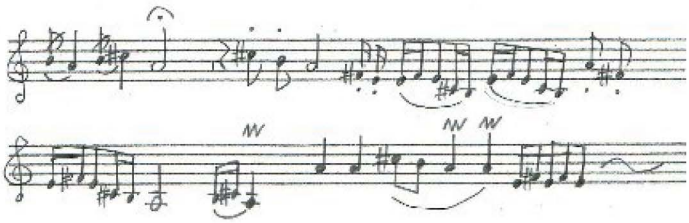
梟（フクロウ）のような心情で女性を眺めることによって、鼻笛を吹きながら誰が自分に適しているかを見ている。

伝承　：使用する竹は山で採集し、一年ほど乾かした特別な竹で製作する（写真は塩ビ管）。昔は演奏できる人が多くいたので簡単に教えてもらうことができた。鼻笛は誰もが吹いてよい笛ではなく、主に妻帯者が演奏する。パートナーや縁者の死において演奏する笛であるから、癒しを施すことのできる人間が演奏するものである。

フラトゥイ（Hla Tui）村へ移動

インタビュー：U Lawng Hong 氏 74歳、フラトゥイ村出身、自宅にて聞き取り。

写真4．U Lawng Hong　写真：後藤修身



譜4．U Lawng Hong 演奏譜

伝承　：20～23歳のころ叔父から教わった。50年前には村で10人以上鼻笛を吹いていたが、現在は3人ほど。昔は民謡なども演奏していた。若い人に演奏を受け継がないか勧めてみるがあまり反応はなく、若者は鼻笛よりもギターが好きだ。

ジェンダー・愛情表現：

若い時、鼻笛を使って女性に言い寄った経験がある。

自身の妻の葬儀の折には、15～20人が一緒に泊まってくれて、そのとき私が長時間、悲しみの笛を吹いていたので、ある女性が心を痛めて休むように勧めてくれた。いつも鼻笛を吹いて、自身をコントロールしている。

インタビュー：鼻笛・Daw Hong Len 女史，歌・Daw Thang Hlue 女史。フラトゥイ村、村の広場にて踊り、狩りの音楽などと共に、鼻笛と歌の演奏。インタビューは行われず、コメントはなし。

六

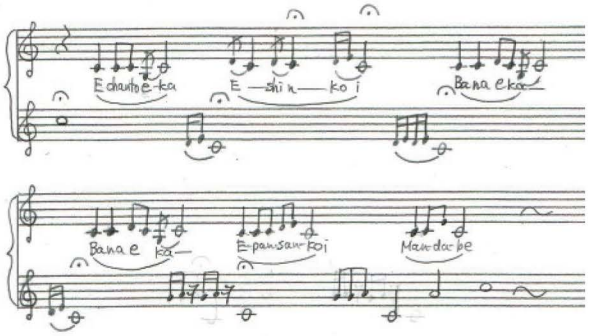


写真 5. 鼻笛 Daw Hong Len 左、歌 Daw Thang Hlue 右　写真：後藤修身　　譜 5. 演奏譜

歌詞の要約：「昔、我々が山頂より降りてきたとき、我々は多くの困難に相対しなければならなかった。モピ山は楽園だと呼ばれている」など聖なるモピ山を歌ったもの。

インタビュー後、移動してジョーク村泊。

2－2－6. 六日目　4月24日（月）　ジョーク（Kyuk）村

インタビュー：U Loi Choi 氏 72 歳、ジョーク村出身、集会所にて聞き取り。

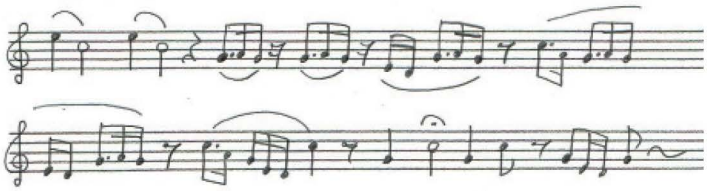


写真 6. U Loi Choi　写真：後藤修身　　譜 6. U Loi Choi 演奏譜

ジェンダー・愛情表現：

大勢の村人がインタビューのために集まってくれて、年配者たちは華やかな気分で自らの文化、踊り、狩りの音楽、朗詠などを聞かせてくれた。Loi Choi 氏も「もしもこの笛を吹くことができなかったなら、結婚をすることはできなかったと思う」「この笛を素敵に吹くことができるのなら、きれいな女性を得ることができる」などとご機嫌である。女性たちに「実際に鼻笛の演奏を聞いたときに、吹き手の愛情を感じますか？」と質問を投げかけてみると、年配女性から「この笛を吹ける人のことが気に掛かる」「笛は心を表すものであるから、その人の心の内が分かるものだ」などの証言を得た。若い人にも意見を求めると「ハイ、同感です」とのことであったが、これはかなり気を使った返答であったような気がする。

鼻笛を１本、譲り受ける。

午後、バイク３台でジョーク村を出発。途中、雨が激しくなり、崖崩れで土砂が道路を塞ぎ、何度もシャベルカ―、ブルドーザーの整地作業を待つこととなり、夜、急遽、山小屋に泊めてもらう。モピ山

近くの山小屋泊。

2－2－7. 七日目　4月25日（火）　モピ山近くの山小屋

日の出と共に山小屋を出発し、ミンダ村へ移動、後藤氏よりインタビュー。ミンダ村泊。

2－2－8. 八日目～十一日目　4月26日（水）～29日（土）　パコック／ヤンゴン／成田

26日バスにてパコックに到着、泊。27日空路ヤンゴン着、泊、28日空路ヤンゴン発、翌29日、成田着。

3. 楽器の構造、音楽の特徴

3－1. 笛（プールン）の写真と採寸図

写真7. U Ning Kee より譲り受けた鼻笛

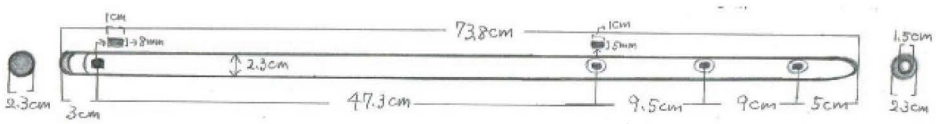


図3. U Ning Kee、鼻笛の採寸図

写真8. U Loi Choi より譲り受けた鼻笛

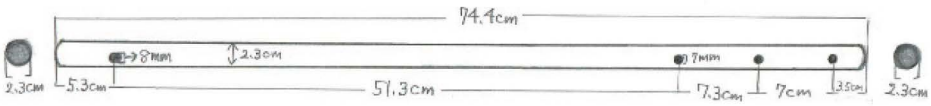


図4. U Loi Choi、鼻笛の採寸図

八

3－2. 鼻笛の構造

鼻笛は乾いた竹でできており、指孔は管尻の近くに空けられている。吹き口は8㎜前後の小さな孔である。Ning Kee氏製作のものは吹き口、指孔ともに竹の表面を少し削って長方形の孔が空けられており、Loi Choi氏のものは丸のままである。共に製作上の手法であろうか。奏者は左の鼻孔を吹き口の右端に充てる。その折、右の鼻孔は管によって塞がれ、左の鼻孔のみから息が出ることになる。笛の管体はかなり長いものなので、有る程度、息のスピードが必要となる。

3－3. 口で吹く横笛が転じて鼻で吹く笛となったのではないか、という仮説

初日のZo Then女史のインタビュー（2－2－3）の際、聞き取りの最後に返礼として、筆者が篠笛で“ふるさと”を演奏した。口で演奏すること自体、珍しく感じたのであろうか「私にも貸してくれ」と、筆者の篠笛を取り、彼女は鼻に充てて吹こうとしたのである。一同、呆気にとられたが、それは彼女にとって極めて自然な行為であった。ミャンマーの鼻笛は、指孔の延長線上に吹き口が空けられていて、それは口で吹く横笛と楽器の構造が同じなのである。一方、太平洋に面する地域の鼻笛は、竹の管頭（先端の節の部分）に吹き口が空けられ、口で吹くことは困難である。何故、ミャンマーの鼻笛だけ横笛と同じ構造なのだろうかと笛奏者としての疑問が湧く。あくまでも仮説であるが、民族移動の長い道のりの中で、訪れた地域で手に入った口で吹く横笛を、自分たちの鼻笛として代用してしまったのではないだろうか。早速、譲ってもらった鼻笛を試しに口で吹いてみたが、筆者には鼻で吹くより口の方が格段と音が出しやすかった。これは論証を伴った説ではなく、筆者の立てた仮説であるが、横笛演奏家としての経験上の勘も、仮説を立てる上で有効ではないかと考え、ここに記している。ミャンマーの鼻笛が構造上、他の地域の鼻笛と根本的に異なっていることは、特に印象に残った。

4. 鼻笛の音楽的特徴と調査対象者の演奏比較

東、東南アジアの鼻笛は、総じて小さい微かな音量で、一人奏でる演奏であるのに対して、ミャンマーの鼻笛は、比較的大きな音で、音をフッフッと切ることもする。これは強い息で吹き込まなければ音が出ないという、笛の構造も関係しているのかもしれない。総じて強い息を使い演奏しているため、旋律が短く途切れ途切れとなる傾向がある。

各奏者同士の旋律比較としては、同じジョーク村出身者の笛には共通のモチーフがあるように聞くことができる。これは一人の奏者から皆が聞き覚えた、或は同じ村では似たような旋律がいつも聞こえていたという経緯があるのかもしれない。また楽器の構造が同じなので、同じ音律にまとまってくるということも考えられる。しかしおおむね奏者達は、その時の気分のおもむくままに演奏しており、旋律を状況により吹き分けている感じはしない。

5. 鼻笛に付随する民族文化

5－1. 太平洋地域の鼻笛文化に付随する共通文化

台湾、マレーシア、ハワイ、フィリピンなど、筆者は鼻笛文化に特化し、それら文化の特徴と差異を検証してきた。各地域の鼻笛の構造、製作過程、音楽など、それぞれ独自の特徴をそなえているが、精神性の高い霊的なものという意識、人の悲しみを癒すための吹奏、愛しい人への愛情表現など、演奏行為としてはミャンマーの鼻笛と、その殆どが一致している。また鼻笛と付随する文化、習慣として、刺青を施すこと、檳榔（ビンロウ・betel nuts）を噛む習慣、過去に首狩りの風習を持っていた、などが挙げられる。

九

5－2. 刺青と精霊信仰

チン州の人々は、元々男女ともに刺青を施す伝統があるが、特に南チンの女性は、顔に刺青を施すことで知られている。欧米からも刺青に関する研究者がジョーク村を訪れるという。ジョーク村出身の民族文化研究家 Salai Thang Kee 氏に、村に伝わる刺青の謂れを聞いた。

インタビュー：ガーン族の人々は、モピ（Mopi）山が楽園であると考え、人が死ぬとモピ山へ魂が向かうと信じられている。モピ山の入り口を守る神、モヌ・オイ（Monu Awi）は、楽園への移入を審査する。ある日、若い女性が亡くなった。その女性は刺青が無いので楽園への移入を許されず、現世へもどされてしまう（phook won・現世に戻る）。つまり女性の顔の刺青は、成人女性として精霊からの許諾を意味するという。刺青を施していない女性は昇天できず今一度、現世に戻されてしまう。現世に戻ると、一度死んだ女性が戻ってくる訳で人々は恐れをなす。したがって刺青前の女性が死んだときには、黒い染料を身体中に塗り、刺青を施したように見せて、現世戻りをしないように見送るという。女性への刺青は、儀式としてシャーマンが祝福（benediction）の後、施され、顔はとても熱く感じるという。そして刺青が入った後は、これで昇天できる一人前の女性となった、という安堵に満たされるそうだ。

現在この村では50歳以上の6～7人の女性しか刺青をしていないが、昔は殆どの人が入れていた。第二次大戦後キリスト教が普及し、異教は許されないのでだれも刺青をしなくなってしまった。またボルネオ島などで見られた、耳たぶを伸ばす習慣は、女性のみではなく男性も施していたが、今はだれもしない。

5－3. 檳榔と首狩り習慣

鼻笛文化と付随する文化に、檳榔の習慣が挙げられる。ミャンマーではコンヤーともクーンとも呼ばれる嗜好品である。台湾や東南アジアの国では多く親しまれており、今まで筆者の行った調査地のどこよりもミャンマーでは普及していた。檳榔の種子と石灰をキンマの葉で包み噛むと、少し覚醒作用があり常習性が伴うもので、タクシー、トラックの運転手、労働者などが多く愛好している。地方都市、山岳部に入ると特に顕著で、女性も多く愛好している。

首狩りに関しては、ガーンの人々の習慣には無かったというが、聖なる牛（マイタム）などを殺し崇めることは大きな誇りであり、シャーマンに祈りを請いマイタムの頭蓋骨を玄関口に飾る風習が残っている。実際に山岳地域の村では、家の入口に牛の頭蓋骨を飾っているところが数多い。「我々は首狩りのような習慣はない」という人と「昔は有ったのかもしれない」と証言する人もいた。

写真 9. シャーマン U Kharn Kee　写真：後藤修身

写真 10. ジョーク村の家、マイタムを飾った軒先

5－4. シャーマンに聞く

現在、キリスト教に改宗せずに精霊信仰を守っている人は、ジョーク村で全体の３％ほどという。しかしこの村には未だシャーマンがおり、彼にインタビューをすることが叶った。

インタビュー：U Kharn Kee 氏 67 歳。　ジョーク村出身、集会所にて聞き取り。

20 歳位のときに村のシャーマンから教えを受けた。村に伝わる神々として、山、岩、木など自然界の精霊を祈っている。結婚式なども取り仕切っていた。モピ山は人が死ぬと召されるとされる近隣に実在する山で、それは文字の無い時代から朗詠によって村民に伝えられてきた。モピ山の山頂に茂る花々は独特なもので香りに満ちている。この辺りでは人が死ぬと火葬するが、その煙は決まってモピ山に向かう。そしてモピ山に向かえば、病気、禁忌などが消える。

現在は村中がキリスト教になったので、シャーマンとしての仕事は引退し農作業をしている。10 年ぐらい前までは、占いなどの依頼があったが、若い人たちには興味がないようだ。

祈祷の仕方としては、誰か病む人がいたとき、聖なる牛（マイタム）や豚を殺して、その内臓を、病人に代わって悪霊に投げつける。山、土地、木などに宿った悪霊が二度と病人にとりつかない様に頼む。

太陽も神であり、雨乞いの祈りがある。ガーン族だけが行っているもので、チン族にもビルマ族にもない。逆に雨が多すぎて晴れ間が欲しいときは、何故、晴れ間が来ないのか太陽に聞くという。村人が集まり「ハッハッハッハッ・・」と太陽の方向に向かってみんなで笑う。10 年ぐらい前までは続いていて、村人たちはその行事を楽しんでいた。

祖父から聞いた話では、ガーンの人はポッパー、バガン、ブンタン、ポンヤー、パコクーの近辺からやってきたそうだ。これらの村はジョーク村の東に位置する平地である。民族衣装に飾りとして付けている大きな貝殻は、海の貝であり、祖父は東の海から来たと言っていた。

シャーマンは詩を朗詠してくれて、その歌詞の内容に「我々はバガンのヤンパからやってきて、モピ山をめがけた」という一説を Thang Kee 氏は訳してくれた。

5－5. 村に残る他の伝承音楽

器楽において、ガーンの人々に伝承されているものは、手で打つ細長い太鼓ティン・ドン（Ting Doeng）、口琴チュリン・チュラン（Chring Chrawng）、そして鼻笛プールン（Pue Luen）がある。太鼓は男性のみが演奏し、口琴は女性のみ、鼻笛は男女とも演奏する。他にも、狩りのときの踊りと音楽、詩の朗詠、祭りの踊りと掛け声など多種存在し、今回の調査でも取材、録画したが、本研究ノートにおいては鼻笛の情報のみ記載した。

5－6. 太平洋地域の鼻笛文化との比較

前述4－1. において、演奏の比較を記述しているが、ミャンマーの鼻笛は、鼻を充てる吹き口が指孔の延長線上に位置しており、音を出すコツを習得することが太平洋地域のものよりもかなり困難である。比較的早い息で演奏することの影響か、ミャンマーの鼻笛だけが、かなり音を短く切って、スタッカートにも聞こえる旋律を奏し、他の地域のものとの差がみられる。

今回のフィールドワークでは、葬祭など実際の儀式場面には遭遇しておらず、人々がどのようにして癒しの場面で演奏しているかは検証できていない。また男女間の愛情表現に関して、演奏する人たちが高齢化してきており、昔の習慣を懐かしむようにして証言する人が殆どであった。とはいえ女性への愛情表現を、実際に鼻笛を使って行っていたという証言を得たのは、これまで台湾のパイワン族の奏者一人であった経緯をみれば、ミャンマーでは実行したことのある人の証言を複数、聞くことができているので、ミャンマーの村の鼻笛文化は、ほんの少し前までは息づいていたと言えるのであろう。

ハワイの鼻笛奏者は「自由に吹くことがこの楽器の伝統だ」と言うように、どの地域の鼻笛演奏を見ても、あまり教えられた旋律にとらわれることはなく、自由に演奏している。このことはミャンマーの鼻笛にも見られる傾向であった。

5－7. 残る文化と消え行く文化

ヨーポンやジョークの村では、狩りの踊りや掛け声などに多くの男性たちが関わっており、太鼓や踊りなど、どのパートも受け持てるほどに嗜んでいる。小さな子供たちも、その姿を憧れの眼差しで見つめている。つまり生活と密接に関係している行事、祭りなどに関わる芸能はしっかりと伝承されているのである。しかし行事そのものが途絶えてしまえば、芸能としてだけ残すことは困難なことである。ミャンマーでは多数派となるビルマ族の地域では、かつての宮廷音楽が残されていて、仏教行事の得度式、忌辰式などで現在でも盛んに演奏されている。一方ビルマの竪琴で有名なサウン（Saung）は得度式などでは使われず、主な演奏場所は観光客向けのイベント、ホテルのロビーでのアトラクションなどに限られてくるという。現在では宮廷音楽から派生したサインワイン楽団（Saing Waing band）が隆盛で、地方都市ではジープに乗り大音量とともに依頼者のもとへ出張していく。これらはやはり式事が芸能を伝承させている一例である。

ミャンマーの山岳地方において多くの地域ではキリスト教が普及しており、異教の行事と定められると、その芸能はどうしても消えていく道をたどることになる。信仰に関することなので、隠れてそっと続けられるものでもない。これは台湾、マレーシアなどの山岳地域でも同じ傾向が見受けられる。

6. ガーンの人々と民族の移動経路、そして本調査の今後の課題

本フィールドワークを通して見えてくる、ミャンマーにおける鼻笛の楽理的な検証として、葬礼などでの人への癒し、男女間の愛情表現に加えて、刺青、檳榔の習慣など、文化的な共通項が極めて多く、太平洋地域と違う文化の流れとは到底考えられない。

ガーンの人々はどこから来たかという問いにジョーク村のシャーマンは「バガンの東からやってきた」と祖父からの聞き伝えと、聞き覚えた朗詠から証言している。民族文化を研究しているKhang Kee氏も「本来、チンの民族は北方の国、チベットやモンゴルからやってきたといわれているが、その一部の人たちは東側から山を越えて移動してきて、少数の人は違う平地に降りていった。もしもガーン族の祖先が遥か太平洋地域から来たとすれば、その地域の人と伝統文化を共有していることが理解できる。我々の民族衣装においても、大きな貝を身に付けているが、そのことも海から移動してきたというルーツに関係するのかもしれない。このような大きな貝は川には無く、大洋のものだと考えられる」と話し「それが南のベンガル湾から来たものか、太平洋から来たものかＤＮＡを調べたい」と、科学的な方法で確かめたいという。そのように現地の研究者と共同で調査を進めることができたならば、ガーン族の移動経路が解明され、ひいては鼻笛のルーツも明かされてくると考える。

特定の民族における人類学的な移動経路を、そう簡単に立証することなどできよう筈はなく、私の力では到底およばない。しかし今回、実際にガーンの人々への調査を行い、ますます東からの民族の移入が有ったとの説を導き出したくなるのである。チン族と台湾の山岳民族との強い共通性を説いた学説も存在し、今後の調査において、ガーン、ダーイ族の鼻笛文化の詳細のみならず、海洋民族の鼻笛文化とミャンマーの山岳地域のものとの関連性を、現地の研究者との共働で手がかりを掴められたらと考えている。

7. おわりに

これまで調査に赴いた国、地域で、鼻笛文化に勢いがある場面に巡り合ったことはない。鼻笛は全ての地域で、たったこの2，30年の間に姿を消そうとしているのである。この貴重な文化を大切にしようとする研究者、演奏家になにができるかと問えば、博物館での文化展示や芸能ショーの演奏機会ではなく、唯一、広く情報を発信することなのではないかと考えている。現代の情報社会において、貴重な文化を内外に発信し、それに興味を持つ人が増えることによって、逆にその文化を保有している当事者に、自信と伝承の意欲が出てくると信じるのである。

筆者のミャンマーにおける鼻笛の調査は今回が初めてで、具体的に明らかにされたということは極めて少ないが、ガーンの人々の村に赴いたときに「我々の民族は東の方から移動してきた」という証言を幾つか聞き取ることができたのは、鼻笛文化のルーツを知ることへの切っ掛けになったと考えるのである。この調査記録をフィールドワークの報告とし、今後の更なる研究に繋げたいと考えている。

写真 11．フラトゥイ村、女性の民族衣装、顔に刺青、胸に貝

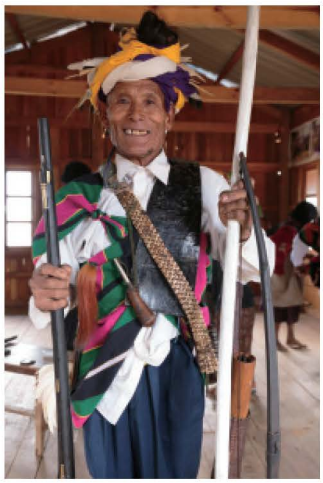


写真 12．ジョーク村、男性の狩りの衣装

写真 13．ジョーク村の教会

写真 14．ジョーク村　全体像

写真 15．ジョーク村の子供たち

写真 16．バイク３台の連隊

本ページ、写真　後藤修身

注

1）ミャンマーでの主要言語はビルマ語で、学術書などの綴りは殆どが英語かビルマ語で書かれている。しかし民族名、土地名など、少数民族言語のローマ字表記は多様に存在する。今回はインタビューと通訳をガーン族の Thang Kee 氏に依頼しており、ガーン語における発音、スペルを尊重している。したがって学術書と

は異なる綴りが多分に記されている。

謝辞

本調査渡航に関して、到底、一人では辿り着けない土地への渡航を可能にして下さった、ヤンゴン在住の写真家・後藤修身氏、南チン地域の村々で、通訳を含め多くのインタビューを取り計らって頂いたSalai Thang Kee氏、そして科研費において多大なご配慮を賜った、洗足学園ご担当の皆さまに、厚い感謝を申し上げる。
なお本研究はJSPS科研費 JP16K02343の助成を受けたものである。

参考文献

田村 克己 / 松田 正彦 2013『ミャンマーを知るための60章』 東京：株式会社 明石書店
土橋　泰子　2009　『ビルマ万華鏡』東京：有限会社　連合出版
西川　浩平　2011　「台湾パイワン族の鼻笛の研究」『洗足論叢』第40号 1-13
　　2015　「ハワイの鼻笛、オヘ・ハノ・イフとイプ・ホオキオキオの文化的考察」
　　『昭和紀要』第35号　78 － 89
山本　茂幸　2015　『地球の歩き方 ミャンマー 2017-2017年版』東京：株式会社ダイヤモンド・ビッグ社 D24